

## 地場産業としてのボード工業

- 使われ方にあわせたボード作り -

岩倉組木材株式会社常務取締役  
会田 徹氏

はじめに ……「放談」めきますが  
新年あけましておめでとうございます。お正月  
という事で、多少、放談めいたことを申し上げる  
かもしれないかもしれませんが、ひとつお許しを願  
いたいと思います。

私、学校を卒業して岩倉組へ入りまして以来、  
いつのまにか長くなってしまいました。現在の直  
接の仕事は、今年の秋をめざして、私共のパーテ  
ィクルボード工場を臨海地域へ移設することであ  
ります。移設といいましても、ほとんど新設とい  
うことになるのですが……。その移設のため  
には、リレーのように、全力疾走して新工場へとバ

トンタッチすることが必要だと考えております。

全力疾走には、技術的な面も多くあるのです  
が、それにもまして関係者全員が、仕事に対する  
情熱や、信念を強烈に持つことが一番重要です。  
当然、無責任なことは、一言も言えない訳です。  
そして、その情熱や、信念をささえるのは、森林  
資源に対する信頼だと思っております。

ふりかえって、本道の林産業を見た場合、本年  
は特にきびしい、さらに言えば、社会全般に急速  
に価値感が変わってきており、林産業界はよ くて  
も、悪くてもそれに対処していかなければならな  
くなってきております。したがって、業界の  
頭脳としての林産試の立場は、非常に重要になっ  
てきます。

世の中は、不確実な、不透明な時代になってき  
たと言われておりますが、そのような時代ゆえこ  
のことを業務の根底において、御精進していただ  
きたい。

## § 工場の技術について

...「コンピューター」も活用して...

さて、この30年を工場の技術という点でふりかえりますと、10年を1つの単位にして変化してきたように思えます。

第1期は、外国の技術を忠実に再現する時期であり、原料的には、薪炭林等の小径木がささえてくれた時期、第2期は、小径木が紙パの資源となり、いかにすれば丸太以外の原料でも処理できるかを模索した時期、そして、第3期は、もうどんな原料が入ってきても“こなせる”ような時期と変化してきました。

これからはじまる第4期の10年は、内外の資源状況を見ながら、地場産業として生きてゆくために、「どのように、管理、運営するか？」という時代であり、できれば、エレクトロニクスの最先端の技術をもとりいれていきたい、というような時期です。

このように、一応区分はしてみました。工場の技術については、まだまだ反省すべき点が多くあります。ほとんど無我夢中でやってきたため、まことに、「大ざっぱすぎたのではないか？」という反省をしています。

たとえば、切削理論はありますが、パーティクルボードについては切削理論との関係で、「本当につっこんでやってきたのか？」、また乾燥や、接着についても同様です。接着剤については、私共の工場では自家生産を行っておりますが、それでも、コストに占める割合はかなり大きく、今後このように“大ざっぱ”にやっていたことを、一つ一つつぶしていかなければならないと思っております。

昨年、王子製紙に入りました5号マシンを見学させていただく機会がありましたが、このマシンのスピードは、1000~1200m/minの速さで走っているのです。これくらいの速さになると、もう、人間では制御できなくなり、コンピュータ制御です。もう、コンピュータに頼らなければ、良い紙ができないという時代になっているんです。私共の新工場でも、「物をつくるレベルを、そこ

まで高めなければならないのではないかと考えております。

## § 資源...もう一度“カリマンタン”へ...

さて、技術の問題は、いま申し上げましたようにいろいろな問題がありますが、資源についても、ラワン丸太の輸出規制に象徴される相当大的な変化があらわれており、いきおい国内資源に目を向けなければならなくなっております。

戦後、日本民族は、とんでもない大きな仕事をやりきったんです。それは、本道のみならず全国で国土の28%、全森林面積の40%にあたる、1千万hrの植林を行ったことです。そして、その資源が今、静かに育っています。

海外の資源といえば、インドネシアのラワン材ですが、1月末にもう一度、機会がありまして“カリマンタン”へ出かけます。インドネシアは産油国であり、近年かなり力をつけてきており、貴重な資源を“ムザムザ”輸出しないと考えるのが妥当だと思っています。

## § マーケット...新しい複合材料を...

マーケットの問題ですが、企業の存立基盤は、皆様の生活をより良くするためのいろいろな努力に対して、正当な評価をしていただく所にあると思います。そのために、「どのような製品を市場に送り出すか？」に、毎日苦心している訳です。

これから、道内の住宅の着工数は、かつての10万戸や、8万5戸という数字ではなく、おそらく6戸ぐらいの水準までに落ち込むのではないかとされており、“パイ”が段々小さくなってきております。

現在、ボード類についてどの程度のマーケットがあるかと言えば、ラワン合板のコンパネは、55年は全国で1200枚/月、00ton/日のパーティクルボードの工場が50工場ある計算になります。道内需要は、1000万枚/年ですから、100ton/dayの工場が、4工場立地できる受け皿があることになります。それでは、「いつ、道内にできるか？」という結論は、むずかしいが、可能性はあるとい

うことです。

また、新しいマーケットを考えるにあたり、私共は、パーティクルボードを使ってほしいということと共に、ボードは使えない所もあることを考えなければなりません。このような場合は、他材料との複合と、その複合材料のマーケットの開発が重要になってきます。その意味で、関連する分野の勉強と、その分野の情報をより多く集めることが必要です。

### § ボードの可能性

#### ...特徴をうちだしたボード...

さて、ボードとしてのパーティクルの可能性と、その限界ということですが、私共がハードボードでなく、パーティクルボードを始めましたのは、たしかにハードボードは興味ある技術でしたが、当時、王子さんがトマテックスをやっているし、それとの競争をさけたいということです。それと、パーティクルボードのマーケットは、雑木の製材、合板の延長上にあるのではないかとということではじめた訳です。

道内では、年間、1500～1600万m<sup>3</sup>の木材が使われておりますが、その大半は、紙パの支配下にあり、パーティクルボードはそれと競争しないように、原料面で“住み分け”（図-2）をしておりますし、その意味では、原料面で弾力性、選択性

がひろい製品であります。また木材小片を1方向に並べた、いわゆる配向ボードや、ウェハーボード（とくに薄く幅の広い削片でつくったパーティクルボード）等の話題が豊富であります。

これらのボードは、原料にあわせて、製品の種類をふやし、さらに附加価値をたかめたボードを作るような時代になるのではないかと考えています。配向についても、一応我々なりの結論を、生産規模で出してみようと考えています。またJISに規定されている曲げや、剥離の強度であります。が、マーケットの詳細な検討をすると、「そこまでの性能があるのか？」と思っております。今後は、地場産業という形が薄くなると、ユーザーの要求にマッチした、“曲げ重視”とか“剥離重視”といったようなボード作りになるのではないのでしょうか。

### § 地場産業としてのボード

#### ...工法とからめ、需要の掘り起しを...

つぎに、パーティクルボードの限界ということですが、チャレンジすべき課題ということで述べます。今後のパーティクルボードは、北方の建築の基礎資材として、マーケットを、工法の改善を伴いながら開拓すべきであります。

また、国産材の産地は、全国にちらばり、さらに、全国にこれだけの量のラワン合板が流通している姿をみますと、今後の姿は、苫小牧で全国を征覇するようなものを作ることではないのではないかと気がしております。

やはり、これからは林産業本来の姿に戻り、地域のマーケットで、きめの細かい需要を掘り起して存立していくことではないか？そのため建築、家具では附加価値をつけ、運賃をいかにカバーするような形で出すとかいろいろな方法があると考えられます。そして今後は、資源、マーケットからますます地場産業としての度合いを高めていくのではないかと考えております。

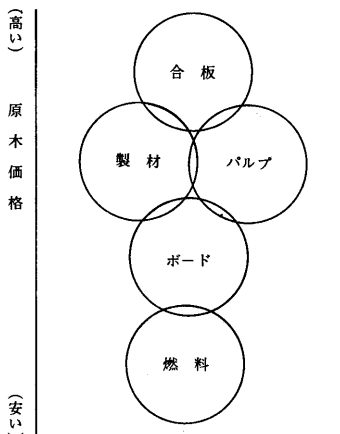


図-2 林産業の原料面での“住み分け”

(林産試 遠藤)